

第四十五回 部落解放・人権西日本夏期講座 参加報告

新型コロナウイルス感染防止のため延期になっていた講座が二月に開催されましたので、オンラインで受講しました。

特に「八〇五〇問題 ひきこもる子・孤立する親への支援」(山口大学大学院教授 山根俊恵)の講演が心に残りましたので、紹介します。

八〇五〇問題とは、八十年代の親が五十代の子どもの生活を支える問題のことです。背景にあるのは、子どものひきこもりです。昨今、NHKテレビ等でも取り上げられてきておりいろいろな機会に耳にするようになってきています。世界でも「ひ・き・こ・も・り」が用語になっていきます。現在日本では三十九歳までが五十四万人、四十歳〜六十四歳が六十一万人、計約百十五万人いるとされています。

山根さんは、
○ひきこもりは、病名でなく現象である。
○特別な人がなるのではなく、いろいろな要因が重なり、社会の中で病弊し、休憩している状態の人。
○さまざまな生きづらさのため、社会と距離をとることが長期化し、精神状態に悩まされ生きる力が低下している状態の人。と、とらえられています。
そして、社会復帰を支えるための課題と方策について、次のように話されました。
○地域の相談窓口は、本当に機能しているだろうか。
○社会的な偏見により、家族が追い込まれ、社会から孤立しているのではないか。
○せっぱつまった親が、本人の許可なく「引き出しビジネス」という民間業者に依頼し、自立支援をうたう施設などに強制して入れてはいないだろうか。
◎親は高齢化してきており限界も感じ始めている。怠けているように見える我が子に、親は働けとつい言うのだけれど、子どもは誰からも理解されない苦しみでもがいているかもしれない。

まずは心の手当が必要。
◎ひきこもりの人をなんとかしようでもなく、問題としてとらえるのではなく、家族支援を基盤とした体制を整えながら、本人の自尊心を高める支援をしていくことが大切。

山根さんの、ひきこもり支援体制「山根モデル」は全国から注目を集めています。ケアマネさんへの著作もあるようです。

講演をお聞きして、頭ではなんとなく理解していたつもりでしたが、心が弱いだけではないか、親や本人がもう少し頑張れば外に出られるのではないかと安易に考えている自分がいることに気がきました。ひきこもりの人に対し、偏見を持っていました。正しく知ることにより偏見を持たない、解決をせらず追い込まず、家族支援から本人支援へとつなげていくこと、が大切だと学びました。

毎年6月23日から29日は
男女共同参画週間です

今年のキャッチフレーズは「女だから、男だから、ではなく、私だから、の時代へ。」

誰もが性別に関わらず職場、学校、地域、家庭でそれぞれの個性と能力を発揮できる社会が男女共同参画社会です。このような社会を築くためには国や地方公共団体だけでなく、一人ひとりが「固定的な役割分担意識」や、このような意識に基づく社会制度や慣行を見直していく取組みが必要です。
※固定的役割分担意識：「男性は仕事・女性は家庭」などのように、性別により役割を固定的に分ける考え方。

人の価値観は多様です。何が望ましいか、どのように「自分らしさ」を表現したいかは人によって異なります。
誰もが「自分らしさ」を大切にできる環境について考えてみましょう。

